

岩手県におけるブックスタート運動について

武田 京子*・大村 佳奈**

(2009年3月4日受理)

Kyoko TAKEDA and Kana OOMURA

The Study of "Bookstart" in Iwate Prefecture

1. はじめに

出生後間もない子どもにも、絵本を与えようとする、保護者たちが増えてきている。1960年代のブルーナによる「うさこちゃん(現在はミッフィ)シリーズ」が日本に紹介されてからであり、その後、日本の作家による乳幼児向けの絵本が作られ、「赤ちゃん絵本」のジャンルが確立し、さらに、月刊乳幼児向け絵本も刊行されている。これらの絵本を子どもに与える保護者のほとんどは、「読書活動のスタート」として位置付けており、読書の目的を「知識を習得」「内容の理解」におき、読書時間の長さや読書量(冊数)の多寡を気にしている。

日本におけるブックスタート運動が開始され、全国に広まり定着しつつあるが、現在、ブックスタート運動の本来の目的とは異なった方向に進んでいるのではないか、という疑問が、保護者の発言の中から感じ取られる。同様に、マスコミでも有名大学に合格した親子調査の結果では、幼いころに1万冊の絵本を読んだことが読み書きの習得につながった、と絵本の読み聞かせをすることが大学合格へのスタートであるかのような取り上げられ方がされている¹⁾。そこで、本来のブックスタートが、どのような経緯で始まり、なぜ日本にも取り入れられてきたのかを振り返り、岩手県で

最初に実施した花巻市と類似事業を行っている盛岡市のブックスタート運動の実態を検証しながら、今後の子育てへの活用の仕方について考える。

2. ブックスタートとは何か

ブックスタートは、1992年、バーミンガム(英国)で始まった。工業を中心産業とするバーミンガムでは、移民による労働者が増加し、識字率の低下が社会問題となっている時期であった。小学校入学時に「本」がなにであるのかを知らない子どもがいたという状況から、できるだけ早い時期に、「すべての子どもに言葉と活字の文化である『本』と出会う機会を作り、生涯にわたって読書を楽しむきっかけを作りたい」という願いから、家庭の中で文字(言語)に接することによって、識字率の上昇を図ることを目的にバーミンガムの図書館、保健局、大学の教育学部によって活動がはじめられた。試験実施として、乳児を養育する300世帯に絵本を配布した。対象年齢の乳児が全員参加する健診時に、参加した親子にもれなく「赤ちゃん向けの絵本」のほかに親子で絵本を楽しむための「アドバイス集」、本を読むことを長く続けるために「図書館案内」「子育てに役立つ地域の資料」を手渡すが、保健婦・図書館員がこれまで本に関心がなかったり、本について詳しく知る

*岩手大学 教育学部

ことのなかった親子に対して、本の楽しさを伝えることに配慮した。また、「読書や本にかかわることは図書館だけがかかわる」という従来の意識を払拭し、ブックスタートを、「子どもが心身共に健康に育つための環境づくりの活動」と位置付け、図書館と保健局の相互連携体制をとることにした。

試験実施後、バーミンガム大学教育学部は、ブックスタート実施家庭と一般家庭の比較による追跡調査報告を行っている。その結果は以下の通りである。

調査①家庭における本への意識の高まりがみられた。

調査②（3歳児時点での読み聞かせ場面の観察で、ブックスタート実施家庭に顕著にみられた事柄）

- ・親が物語以外の語りかけや質問をする
- ・親が物語の続きの予想をさせる
- ・子が自分でページをめくろうとする
- ・子が頻繁に質問する
- ・子がより深く物語に参加する

調査③（就学時の基礎テストからの考察）0歳児から本の時間を習慣として持つことが、その子の言語面計数面双方の思考能力の発達に大きな影響を与える。

追跡調査の発表によって、ブックスタートを採用する自治体は10%（1994年）19%（1996年）27%（1998年）と増加した。大手スーパーマーケットの資金援助を受け92%（2001年）となったが、資金援助が終了し、87%（2003年）と減少し、2005年から3年間、中央政府関係機関の支援が決まった。

“Share books with your baby”（本を通して、赤ちゃんや保護者が楽しいひとときをわかちあうこと）を合言葉に始まったこの運動は、乳児を育てている家庭に本を手渡すことによって、読み書きのできる子どもを育てるばかりでなく、「絵本を読む親子の安定の時間の確保」による親子の精神の安定を促進し、精神が安定した子どもの自発性を育てることに有効であることを示している。

3. 日本におけるブックスタート運動

ブックスタート運動は、衆議院・参議院で決議された「子ども読書年」（2000年）を契機に研究がはじめられた。2000年11月、「子ども読書年」推進会議は、英国からブックスタート関係者を招聘し、シンポジウムを開催した。日本では識字率の問題はないが、字を読むことはできても、読書を楽しむ子どもも大人も少なくなっていることが指摘された、それと同時に、ブックスタートが読み書きなどの早期教育を目的としたものではなく、親と子がともに本を開く時間が、子育て中の保護者にとってリラックスした時間になることが話し合われた。発祥の英国とは、社会、制度、文化的背景が異なり、また、市民運動としての読書推進運動の歴史を持つ日本では、英国のブックスタートをそのまま踏襲するのではなく、日本の子育て事情に合った展開が必要であった。「子育て不安」「育児ノイローゼ」という言葉が珍しくなくなり、ほとんどの親が育児に自信を持ってなくなっている時期に「絵本を仲立ちに親子がリラックスした時間を持つこと」を目的とした活動は、子育て支援としての意義のあるものとしてとらえられた。

2000年11月東京都杉並区の保健センターで、試験的に実施された。230組の生後4か月の乳児を持つ家庭に、ブックスタートパックが手渡された。ブックスタートパックには、小児科医・絵本作家・発達心理学者・児童文学研究者・図書館司書などによって厳選された絵本2冊のほかに、乳児の生活に絵本を取り入れることの楽しさ・重要性を伝えるイラストアドバイス集『あかちゃんのすきなもの しってる?』『赤ちゃん向けおすすめ絵本リスト』『(図書館)貸出登録申し込み書』『子育て支援に関する資料』が入っている。健診時は保護者が緊張したり疲れていることも考えられるので、できるだけリラックスした状態で手渡せるよう各保健センターの実情によって、場所の設定や方法は異なるが、できるだけ少人数でゆったりとした雰囲気の中で説明できるような工夫をして実施した。図書館員と保護者が親しく話をし、自

由に質問を受けることも心の安定に有効であることがわかった。さらに、読書の楽しみを知るきっかけづくりとしてのブックスタート（絵本の配布）を永続的な本への関心や楽しみにつなげていくために、子どもの成長に応じた本の紹介やお話し会への参加を紹介する、フォローアップ活動が必要であることもわかった。試験実施はマスコミによって報道され、翌2001年には12市町村で開始され、東京都にNPOブックスタート支援センターが設立された。

ブックスタートは、「ブックスタートの願い」²⁾と「大切な5つのポイント」³⁾を共有した地域の活動として、全国に広がっている。2009年1月31日現在、ブックスタート実施自治体は685市区町村（全国市区町村数は1804）となっている。

4. 岩手県におけるブックスタートの導入

特定非営利活動法人ブックスタートによって、ブックスタートの活動と確認されているものは、岩手県では、一戸町・大船渡市・久慈市・葛巻町・遠野市・西和賀町・二戸市・花巻市・平泉町・普代村・陸前高田市の11地区（2009年1月31日現在）である。

岩手県でブックスタートを最初に実施したのは花巻市の2002年である。2001年12月に花巻市議会の一般質問にブックスタート事業の導入は提案され、教育長によって実施を前提にした検討が始まった。2002年の実施を目指し、図書館、保健センター、市教育委員会生涯教育振興課、児童社会課によって準備が進められ、2002年度から保健センターで行われる11か月育児学級で行うことを決定した。健診では、子ども自身が落ち着かないこと、健診の一連の流れの中でゆっくりとした時間が確保できない、ことを考慮し育児学級での開催にした。ブックスタート本来の考え方では、4か月頃を想定しているが、花巻市では離乳食が安定し、心身ともに幼児への準備が出来上がる11か月に、絵本を「心の栄養」としての親子関係を確立する補助材料として与える、という意味付けをし

ている。事業の主管は図書館とし、学識経験者による配布絵本の選定・NPOブックスタート支援センター制作のビデオによる職員の研修・読み聞かせボランティアの公募および打ち合わせ・研修会を精力的に行い、4月12日の第1回のブックスタートを実施した。

前述の11地区のほかに岩手県の市区町村では、ブックスタートの名称で類似事業を行っている。岩手県で把握しているのは、23地区（平成17年9月）であり、一番古いものは西根町（現八幡平市）と雫石町の1995年である。職員・担当者の人事異動のため正確な内容は分からないが、西根町では「親子図書館訪問」という名称で町立図書館独自の活動として3歳児の親子を招待する、当時の館長の発案によるものであったという。雫石町では3歳児を対象とした郵送による「絵本贈呈」（2002年まで）であった。現在のブックスタート類似事業とは、地域の全乳幼児を対象とした、保健センターとの連携による乳児期から読書の重要性を保護者に伝えようとする活動であり、図書館で希望者や来館者のみを対象とした読み聞かせなどは除外される。類似事業としてのブックスタートの導入が急速に進んだのは、テレビやビデオ、インターネットなどの様々な情報メディアの発達・普及や子どもの生活環境の変化により、子どもの読書離れが進んでいることに歯止めをかけるための対策である、「子どもの読書活動推進計画」の実施によるものである。政府は、平成13年に議員立法による「子どもの読書活動の推進に関する法律」を制定し、公布・施行された。14年8月には「子どもの読書活動に関する基本的な計画」を策定・公表し、県・市町村は子どもの読書活動の推進に関する施策についての計画を立案することになった。岩手県では16年3月に計画を策定し、各市町村で具体的な子どもの読書活動推進が行われている。

5. 岩手県におけるブックスタートの実態

(1) 花巻市

2002年の開始時と同様のブックスタート事業が、現在まで継続している。育児学級の周知は個人あての郵送による通知と公報の掲載方法がとられている。開始当時と同様に、保健センターで行う11カ月児対象の育児学級の中で行われる。図書館員・ボランティアから一組ごとにスタートパックが渡される。スタートパックには、推奨を受けた絵本2冊⁴⁾と子育て中の生活アドバイス集『あかちゃんの好きなもの知ってる?』、NPO法人ブックスタート作成の『おすすめ絵本リスト』⁵⁾、花巻市立図書館の利用案内がおさめられている。手渡す時の図書館員およびボランティア間の保護者に伝える確認事項は以下のとおりである。

- ①「絵本を読む（見る）こと」は読書ではなく、本を見ながら赤ちゃんに語りかけること。機嫌が悪い時や興味を示さない時は無理強いないで時を改めて少しずつ行うこと。
- ②絵本読みは気負わずにゆったりと赤ちゃんの表情を見ながら親自身が楽しむこと。
- ③母親だけが読むのではなく、家族や赤ちゃんのまわりの人誰でもよいこと。
- ④スタートパックの中身

【平成19年9月28日の実施例】20組の親子が対象

- ・受付で問診票と母子手帳を提出
- ・身体測定（身長体重頭囲胸囲）
- ・全体講話。（保健師：乳児期から幼児期への心身の発達、栄養士：栄養と食事、歯科衛生士：歯の発達と歯磨きの仕方）
- ・図書館員によるブックスタートの説明と、スタートパックに入っている絵本の全体への読み聞かせ（15分程度）
- ・保健師による個別育児相談
- ・母子手帳を受け取って育児学級は終了

全体への読み聞かせが終わり、個別育児相談を待つ間に、図書館員とボランティアが各親子を巡回し、スタートパックの説明および家庭での子ど

もとの過ごし方などの助言をおこなう。育児学級は開始から約1時間30分程度で終了する。

育児学級へ欠席し、ブックスタートを受けなかった対象者へは、保健センターからの個別連絡により、①次回の育児学級への参加、②図書館（保健センター）での随時の手渡し、③図書館で年2回行う臨時のブックスタートの方法をとり、ブックスタートの参加率の向上を図っている。

【フォローアップ事業】

「ブックスタートは、絵本と一緒に親子で楽しい時間を過ごすきっかけづくり」と位置付けているために、読書や図書館の活動への参加のための活動が企画実施されている。年齢別読み聞かせ会：2002年から0～2歳児、5歳～低学年（2006年から5～6歳と低学年に分離）2004年から3歳児を追加し、現在では4つのグループで実施している。幼児にはパネルシアターや手遊びを加えるなど対象年齢の発達段階や興味・関心に沿った工夫や日程（時程）の調整を行っている。

【ボランティアの養成】

ブックスタート活動には、ボランティア団体「もじもじクラブ」登録の20名のほかに、48名が関与している。主婦業の傍ら子育ての経験を生かす目的を持つ人や絵本や読み聞かせに興味のある人が参加している。公報によって募集され、図書館員や経験者からの指導を受け活動に参加する。育児学級におけるブックスタートの終了後、図書館員とボランティアはその日の感想や反省を話し合い、実際の経験を積みながら意識と技術の向上を図っている。

【合併によって花巻市となった地区】

平成18年4月、大迫町・石鳥谷・東和町は合併し花巻市となった。各地区の過去および現在の活動内容は以下のとおりである。

大迫町：2003年より保健センターで図書館員による読み聞かせ活動を実施。2005年より2歳児を対象に絵本を配布。2005年12月3日、図書館長の

寄付金を財源とし、図書館職員と図書ボランティアによって親子ふれあいの遊びも含めて2日間行われた。現在は、2か月に1回偶数月第4火曜日午後1時から、乳児健診（2・3カ月児、7・8か月児）離乳食学級（4・5カ月児）育児学級（11・12カ月児）を一斉に行い、育児学級対象者にブックスタートを行っている。この日に合わせて、保健センターで移動図書館による本の貸し出しを行っている。

石鳥谷町：2003年、保健師と図書館員の間でブックスタート事業開始の希望が出る。絵本配布のための財源が確保できなかったため、健診時に読み聞かせ活動と本の貸し出しを行った。現在は毎月最終金曜日に実施。

東和町：花巻市のブックスタートを知り、「幼い時から絵本に接することにどのような効果が見られるか」に関心を持ち、2004年8月6日から3・4か月児を対象にブックスタートパックを配布し、読み聞かせや紙芝居を行った。財源は、東和町、図書館、保健センターの共同出資とした。配布率は100%であった。なお、新花巻市となった以降は対象児の月齢を11か月に統一して、偶数月第2火曜日9時から、主管を図書館として事業を行っている。

(2) 盛岡市（盛岡市保健センター・都南保健センター・玉山区保健センター）

盛岡市では、『盛岡市子どもの読書活動推進計画』⁶⁾ 第3章-1-②家庭教育に関する学習機会を通じた読書活動への理解の促進、の中でブックスタート活動を取り上げている。

「ii 市では文部科学省が作成した『家庭教育手帳』を母子手帳の交付時や就学児健診時をはじめとして、子どもを持つすべての親に配布しており、この中には家庭での読み聞かせや、子どもが読書の時間を持つよう家庭で習慣づけることの大切さについてのべられています。よってこれを積極的に活用し、その理解の促進をはかります。また、ブックスタート事業によって培われた家庭内で本に触れる習慣を、より確固なものとするよう

社会的気運を醸成していきます。」と本文の中で説明があり、ブックスタート事業については補足説明の中で、ブックスタートの英国発祥から日本での歴史について簡単に触れたのちに、「当市では、乳幼児に対する絵本等の配布は行わないものの、乳幼児期にあっては家庭での読書活動に対する保護者の理解や関心が重要である、との考えから、読み聞かせ等保護者への啓発活動による推進を図っています。また、『次世代育成対策推進行動計画』の中でもブックスタート事業について推進していくこととしています。」と述べている。下線を施した部分から、ブックスタートが読書活動に主眼を置いた活動として、認識されていることがわかる。盛岡市のブックスタート類似事業は、2005年から1歳6か月健診時に「読み聞かせ事業」として実施され、現在に至っている。

現在の盛岡市は、紫波郡都南村（1992年）と玉山村（2006年）を合併している。ブックスタート関連事業の内容や方法については、3か所では少しずつ事情や内容に差異が見える。

【盛岡市保健センター】

2005年6月から毎月2回水曜日の1歳6か月健診時に、絵本の読み聞かせと盛岡市が作成した読み聞かせ推進パンフレット『絵本だあいすき』とお勧め絵本リストの配布を行う事業として始まった。健診対象児数が多いことから、2007年より回数を増やし月4回になっている。一回の健診では約40組の親子が対象となる。9時の受け付け開始から15分ごとに10組それぞれ受付時間が指定されている。受付が終わった後、オリエンテーションが始まるまでの待ち時間にボランティアによる読み聞かせが行われる。受付開始から15分経過（または10組集合）するとオリエンテーション室に案内され、図書館員か保健師からブックスタートと健診全体の説明を受ける。読み聞かせとブックスタートの説明が、場所を移動して別の人から行われるため、話がつながらず、健診へと保護者の関心が移ってしまい読み聞かせや、ブックスタートの説明の印象は残らない。また、健診の回数が増えた

が、図書館員の数従来と変わらないので、図書館員が出席するのは月に1回である。残りの三回の説明は保健師が行うが、話すべき内容の指示などが無いので、パンフレットの説明だけに終わってしまうのが実情である。

健診の場で「読み聞かせをする」ことだけが、ボランティアの役割であり、親子へのきめの細かい絵本の活用指導とはなっていない。また、盛岡市では読み聞かせ回数の増加に伴い、2007年、読み聞かせボランティアの養成講座を行っている。「読み聞かせの趣旨と理論」「パンフレット『絵本だあいすき』の説明」「わらべうたの実践」「読み聞かせの実践」が主な内容である。受講を終了すると読み聞かせボランティアとして登録され、健診の場へ派遣される。2007年度は33名の登録があり、年に1回スキルアップのために研修や情報交換会が開催されている。

【都南保健センター】

盛岡保健センターと同様、2005年6月から月1回第3金曜日に実施されている。対象数は月によって異なるが25～40組、平均すると30組である。読み聞かせボランティア2名が3～10組の親子を対象に数回にわたって畳敷きの小部屋に移動し、読み聞かせを行う。健診の時間の流れで区切ることで人数に差がでる。わらべ唄⁷⁾を歌ったのち、読み聞かせの趣旨と目的、ブックスタートの説明を行い、保健センターに隣接した図書館の紹介も行う。

図書館員は健診会場には行かず、活動終了後に図書館事務室でボランティアとミーティングをすることによって、連携を図っている。ボランティアには、先輩ママとして若い母親へ「伝える」役割が期待されている。ボランティアの育成指導にあたって、ブックスタートの趣旨や読み聞かせ事業に関する内容を、正確に自分自身の言葉で説明できるまで理解してもらうことをポイントとした。

【玉山地区保健センター】

玉山地区では、合併以前、2002年から洪民図書館の単独事業として、3歳児に絵本の贈呈を含む

事業を行っていた。全国的にブックスタートが注目を浴びるようになり、読書啓発や普及について図書館でできることを考え検討したことが発端となっている。多感で好奇心にあふれる3歳児とその保護者を対象に、絵本や読み聞かせの大切さを理解してもらい、家庭で絵本に親しむきっかけづくりになるよう、図書館独自の活動として行った。対象者に案内を出し、姫神ホールで実施したが、参加者は20～30%であったという。同時に読み聞かせボランティアの養成講座をはじめ、読み聞かせグループ「とんがりやま」が誕生した。「とんがりやま」は現在図書館独自の読み聞かせ会で活動し、1歳6か月健診には、参加していない。図書館は、ボランティアの研修にはかかわるが、読み聞かせ事業に直接かかわりをもっていない。

合併後は盛岡市と同様に1歳6か月健診の際に読み聞かせ事業を行うことになった。月1回の保健センターでの実施を計画しているが、対象児数にばらつきがあるため不定期に行っている。対象者には郵送によって実施日を知らせている。2007年11月の実施では、健診対象者12名、ボランティア2名、保健師、歯科医など関係者が全員集まったところで読み聞かせが行われた。その後、健診のオリエンテーション、歯科検診、問診と進行する。

盛岡および都南と大きく違うところは、集まったほとんどが既に知り合いであること、転入などで初対面であっても、すぐにコミュニケーションがとれる雰囲気があることである。地域内で大人と子どもの関係づくりが、絵本や読み聞かせをするまでもなく、すでに出来上がっている。読み聞かせ事業を開始する前のボランティア養成講座で、受講者から「なぜ、読み聞かせをしなければならないのか」という質問が出たのも納得できる状態である。

6. これからの課題

「本のひととき 赤ちゃんと一緒」をキャッチフレーズとするブックスタート活動が、全国に広がり定着し、岩手県において類似事業であっても

広がりを見せているのは、喜ばしいことである。

しかし、これらの広がりには「子どもの読書活動の推進に関する法律」が公布され、学校における「朝の読書」の効果の報告などによって、後押しされている印象もある。もともとブックスタートが日本にとりいれられた大きな理由である、親子の絆づくり、自然な親から子への働きかけを知るなどの性格が薄れてきてしまっているのではないだろうか。その結果、「ブックスタート」を文字通り読書指導のスタートとして受け取る保護者が増えてきている。

花巻市のブックスタート会場でのインタビューで、「3人きょうだいで、2番目の子は、お兄ちゃんの本ではなく自分の本だととてもよこんだ。だから今回どんな本がもらえるかと楽しみにしてきた」「長男のとき絵本をもらって感動して、今日は期待してきました。上の子が下の子に読んで聞かせているのがうれしいです。」と好意的な答えがある半面、「本をもらえるのはうれしいけれど、まだ本は読まないの、読むようになってからでもいい」「読書はまだ早すぎます」「上の子に手がかり。絵本を讀んではいない。これからも読む機会が増えるとは思えない」などの否定的な意見が聞かれた。また、盛岡市保健センターで1歳6か月健診を受けた経験のある保護者に健診時のことを問うと、読み聞かせが行われていたことについての記憶はなく、健診が早く終わることばかりを考えていたという回答であった。ブックスタートの活動趣旨を正確に実施するには、絵本配布の財源確保よりも、適切な機会の設定と運動を正確に伝える人材の確保が必要である。

また、花巻市11か月、盛岡市1歳6か月という時期も再考の必要がある。試験実施として杉並区で行った4か月という時期は、保護者にとっては育児にゆとりができる時期であり、子どもはまだ、活発に動き出す時期ではない。子どものために何か新しいことをしてみようかという時に絵本と一緒に読むことに意味がある。もう少し早い開始が必要なのではないだろうか。しかし、すべての対象児を一同に集める機会として、育児学級・健診

時を実施の時期として決定せざるを得ない行政の事情を考えると早期の実現は、難しいのかもしれない。

ブックスタートおよび関連事業の実際について、花巻市立図書館、花巻市保健センター、盛岡市立図書館、盛岡市立都南図書館、盛岡保健センター、盛岡市都南保健センター、盛岡市玉山区保健センターの職員の方々に見学・解説などの機会を提供していただいたことを深く感謝いたします。

【注釈】

- 1) 「子育てコストと工夫—東大、京大合格の親子141組調査で分かった難関突破までの知恵」(『AERA』No14) 38ページ
- 2) ブックスタートの願いとは、「赤ちゃんの体の成長にミルクが必要なように、赤ちゃんのことばと心を育むためには、温かなぬくもりの中で優しく語り合う時間が大切です。また、赤ちゃんと同じくそうしたひとときは、周りの大人にとっても心安らぐ楽しい子育ての時間となります。ブックスタートは、肌のぬくもりを感じながらことばと心を通わす、そのかけがえのないひと時を「絵本」を介して持つことを応援する運動です。」である。
特定非営利法人ブックスタート『第2回ブックスタート全国大会報告書』(2004) 59ページ
- 3) ブックスタートの大切な5つのポイント
 - ①ブックスタートは赤ちゃんと保護者が絵本を介して向き合い“あたたかくて楽しいことばのひととき”を持つことを応援します
 - ②ブックスタートは地域に生まれたすべての赤ちゃんとの保護者が対象です。
 - ③ブックスタートはメッセージを直接伝えながら絵本を手渡します。
 - ④ブックスタートは地域内の連携のもとに地区町村単位で行われます。
 - ⑤ブックスタートは特定の個人や団体の宣伝・営利・政治活動が目的ではありません
特定非営利法人ブックスタート『第2回ブックスタート全国大会報告書』(2004) 59ページ
- 4) 配布される絵本は、活動に賛同した出版社の補助があり、自治体は特別価格で購入できる。花巻市の場合、同一の本を所持している申し出があると、他の本に交換できる。
- 5) おすすめ絵本リストは、特定非営利法人ブックスタートによって20冊選考作成されている。
- 6) 盛岡市教育委員会事務局生涯学習スポーツ課『盛岡市子どもの読書活動推進計画』(2005) 7ページ
- 7) このとき歌われるわらべうた「せんぞう まんぞう」には、港に宝を積んだ船が福の神とともに港にやってくる内容がうたわれている。膝の上に載せている宝(子ども)を大人たち(保護者とボランティア)がしっかりと守っていきましょう、というメッセージが込められている。